

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12612

研究課題名(和文)身体性を基盤とした他者との共存の可能性を探求する - ケニアの自転車競技選手を事例に

研究課題名(英文) Potentiality for Coexistence Based on Corporeal Experience: A Case Study of Competitive Athletes in Kenya

研究代表者

萩原 卓也 (Hagiwara, Takuya)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・研究員

研究者番号：80803220

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：成果は大きく3つにわけられる。(1)自転車競技選手の追跡調査から、都市部に生きる若者の生計戦略を生涯の過程に位置づけてあきらかにすることができた。ここでは、COVID-19禍におけるアスリートの生活形態の再編という重要な論点も含まれる。(2)競技選手時代に培った「技能」の引退後の展開、すなわち、元競技選手にみられる身体性を基盤とした関係性の持続的な性格をあきらかにすることができた。(3)植民地期よりアフリカの若者に向けられてきた、「発掘を待つ才能ある身体」と「エンパワーされるべき身体」というまなざしが、自転車競技団体の形成と存続に強い影響力をもっていることをあきらかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、身体性を基盤とした他者との共存可能性を考察する点で、社会集団の在り方とその存続方法を探究してきた人類学的研究を更新する。スポーツ実践を個人の内面だけではなくモノや周囲の環境も含めた生態学的な視角から捉え直す試みは、精神論や根性論といった心の問題に結び付けられてしまいがちなスポーツ選手に対する理解を相対化することにもつながる。また、ケニアの自転車競技選手の引退後の社会生活や競技時代に育んだ技能の展開を民族誌的にあきらかにすることは、東アフリカの都市社会に生きる多くの若者が直面する社会問題の実態を把握し、その解決方策を考える際の基盤となる。

研究成果の概要(英文)：The research achievements are threefold. (1) The follow-up study of competitive cyclists allowed to identify the livelihood strategies of young people living in urban areas over the course of their lifestages. This includes the important issue of the restructuring of 'athletes' lifestyles in the COVID-19 disaster. (2) The post-retirement development of "skills" cultivated during the competitive athletic period, i.e., the sustained nature of relationships based on embodied experiences among former competitive cyclists, is revealed. (3) This study demonstrates that the "talented body waiting to be discovered" and the "body to be empowered" gaze directed toward African youth since the colonial period had a strong influence on the formation and the shape of the cycling group.

研究分野：文化人類学/スポーツ人類学

キーワード：スポーツ 文化人類学 ケニア 身体 自転車 身体感覚(疲労・痛み・苦しみ)と他者理解 アフリカのスポーツ選手の生活実態 ケニアの自転車競技選手の生涯

## 1. 研究開始当初の背景

ある集団の社会性について論じることは、本質的に他者と生きざるを得ない人間の共存の可能性を模索し、その共存の在り方を多様化していく点で重要である。そのなかでも、社会集団の成立と維持において、そこに制度や理念の優位性を認めるのではなく、身体が「いま - ここ」に定位している現実から考えるという試みの流れの中に、本研究は位置づけられる。身体性から共同性の成り立ちを考察した研究群のなかで、早木は生活リズムの同調が共同体の成立の大きな要因であることを指摘している[早木仁成(2016)「共感と社会の進化」]、またサブスタンス論では、身体を構成する物を共有・交換するという実生活における人びとの関わり合いの中に、人びとのつながりの根拠を見出している[Carsten (2000) Culture of Relatedness]。また、スポーツ選手を対象とした研究群は、身体感覚に焦点を絞り、お互いが共通の土台を持たないところで生起する創発的な関係性を射程に入れた議論を展開してきた。そこで注目されてきたスポーツ選手の特徴ともいえる豊かな身体的経験というのは、スポーツする身体どうしのリズムの同調や共振から生まれる興奮、一体感、高揚感といった非日常的で忘我的な身体感覚であった[亀山佳明(2012)『生成する身体社会学』/中井正一(1962)「スポーツ気分の構造」『美と集団の論理』/Jackson, Susan. and Mihaly Csikszentmihalyi (1999) Flow in Sports]。これまでの研究の傾向をまとめると、共同性を確立していくために、人びとは共有できるものをいかに共有し、同調できるものにいかに同調しているのか、という点が焦点化されてきたとよい。しかし、そこでは、一見したところ共有や同調とはかけ離れた、痛みや疲労といった感覚は軽視されてきた。

報告者はこれまでの自身の研究において、この問題を解決するために、ケニアにおける自転車競技選手育成団体Aを対象とし、調査を実施してきた。疲労の感覚に焦点を当てるために、持久力を競う過酷なスポーツである自転車競技に着眼した。ここでいう自転車競技とは、ツール・ド・フランスなどで知られる一般道を使用した長距離ロードレースである。報告者が調査を行う団体Aは、ケニアの貧困層の青少年を15人ほど集め、彼らをプロの自転車競技選手へと育成することを試みる団体である。報告者は彼らの日常に迫るために、彼らが共同生活を送るキャンプにて寝食をともにし、家事の分担から余暇の行動までを詳細に参与観察してきた。さらに、報告者自身も自転車に乗り、彼らとともに練習や大会出場を重ねる中で、彼らと身体感覚を共有するよう努めてきた。現地フィールド調査は2013年から実施し、本研究課題の申請時点では、合計18ヶ月間の調査を重ねてきた。本研究課題は、このフィールドにおける発見の延長線上に位置づけられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ケニアの自転車競技選手を事例に、たがいに葛藤や嫉妬を抱えつつも共存している集団の在り方を探究することを通して、社会集団の生成とその持続性を論じる研究に一石を投じることである。本研究では、自転車競技選手の身体性、すなわち「身構え」に注目する。他者との共存を論じる際に、何かを共有、または何かに同調することによって共同性が立ち上がることを指摘することも重要であるが、むしろ問うべきは、差異や葛藤を抱えながらもたがいに共存することを可能にするその在り方である。これまでのフィールド調査から、人と人の相互関係だけでなく、環境を接点として生じる「身構え」が、競技選手が他者と共存しようとする際に重要な役割を担っている可能性を導き出した。

これまでの研究成果において、練習や大会後の極度の疲労によって立ち現れる身体性によって、団体Aという社会集団の共同性が保たれている可能性を指摘した。極度の疲労は選手に対して、ある特定の仕方では周囲の環境に接することを要請する。それをここでは「身構え」と呼ぶことにする。まさに、この環境に対する身構えが、本来個々の出来事として考えられがちな「疲れる」という経験を、環境を接点として相互に参照可能なものにしていった。それが、この集団の共同性を支えている大きな要因であることを指摘した。この集団の共同性が報告者にとって特別なものに感じられたのは、(1)環境を接点とした彼らの関係性は、「感覚の共有や同調である」と簡単に片づけられそうにないこと、(2)彼らの共同性は決して一枚岩ではないこと、による。というのも、それぞれの選手の2015年10月から2016年3月までの半年間の総収入額を調べると、選手のあいだには最大で40倍もの開きがあり、その格差によって、選手のあいだに深刻な摩擦がしばしば見受けられた。しかし、それでも彼らは団体としてまとまり、ともに練習をこなし、チームとして大会に出場する。ここには、「一緒に生活してきたチームメイトに対する助け合いの精神」といった陳腐な説明では捉えきれない、身体性を基盤とした他者への独特な姿勢、すなわち身構えがあるように思えてならない。したがって、本研究課題の核心をなす学術的「問い」は、摩擦や嫉妬を抱えつつも他者と共存する在り方の可能性を、身構えといった身体性からいかに探究することができるか、である。それは、スポーツ選手の身体的な経験をモノや周囲の環境との接点において捉え直すことで、この環境を接点として生じる「身構え」による他者との共存の可能性を探究することである。

本研究の独自性は、制度や理念からではなく、あくまで身体性を基盤として社会集団について考察する点である。それを、豊かな身体的経験を有するスポーツ実践において、また努力の結果や各個人の差異が目に見える形で分かりやすいスポーツ空間において実施するところに、独自性がある。本研究の創造性は、上記の目的を達成するために、生態学的観点からスポーツ実践を考察しようと試みることである。さらに、「身構え」はいかに他者と共存する姿勢へと接続されるのか、という点を深めるために、生態学的な視角の延長線上に展開される哲学の知見や「身体化された心」の研究群を参照するところに発展性がある。

### 3. 研究の方法

当初の実施計画に沿う形で、初年度である2018年度は文献研究（理論研究と事例研究）と研究者とのネットワーク構築に力を注いだ。具体的に、理論研究では、アフォーダンスに代表される生態学的視点にまつわる諸概念や「身体化された心」の研究群を精読することで、スポーツ選手の実践をモノや周囲の環境との関係において捉え直すことができた。事例研究では、障害や病いをもった「思い通りにならない身体」と、周囲の環境との相互作用を扱った研究を精読した。そのなかで、周囲の環境との関係に埋め込まれた身体の直接経験こそが、思考・認識・知覚の基礎になっているとする立場を批判的に検証することができた。

2年度目である2019年度は、引き続き文献研究を継続すると同時に、当初の予定通り8月から9月にかけてケニアでの現地フィールド調査を実施した。今回の調査は、これまでの現役選手を対象とした調査とは異なり、成績不振などを理由に競技団体から離れざるをえなかった元競技選手を対象にした。彼らの現在の生活状況を把握し、さらに競技選手であった過去が現在に対して与える効果について聞き取り調査を実施した。そのなかで、彼らは現役選手との距離を保ちつつ、また自身が選手時代に培った人脈を巧みに頼りながら、競技以外の仕事で生計を成り立たせていた。その現状から、現役と引退選手の共存というよりも、並存という分析の方向性が導き出された。これは、セカンド・キャリアという言葉で単純に位置づけられてしまいがちなアスリートの競技後の生活を、現役選手と引退選手、および引退選手どうしの関係から再考する事例にも成り得る。

3年度目である2020年度は、COVID-19による影響で、フィールド調査の見合わせや参加予定の学会が中止になるなど、計画の変更を迫られた。ケニアへの渡航がかなわないながらも、継続して文献研究をおこないながら、現時点でのデータを整理・分析し、研究成果を積極的に口頭で、および論文で発表した。とくにオンラインツールを活用しつつ実施したそれらの発表機会においては、国内外のあらたな人脈を広く築くことができた。さらに、それぞれ異なるテーマが設定された発表機会において、アフリカにおけるスポーツの歴史とアスリートの身体の位置づけ、都市部に生きる若者の生計戦略、アフリカにおけるスポーツ開発援助事業の展開というように、それぞれ異なる文脈において本研究の今後の課題を浮き彫りにすることができた。

当初は3年間で計画した研究課題であったが、COVID-19の影響も考慮し、フィールドワークの再開に希望を託し、研究期間の延長を申請した。COVID-19の感染拡大の中で、ケニアのアスリートもあらたな生活様式を問われていた。4年度目となった2021年度は、ケニアでの現地調査ができない代わりに、遠隔でインタビュー調査を実施する環境を整え、オンラインツールを活用しながら現地のインフォーマントにインタビュー調査をおこなうことができた。環境を整えるために、旅費等で使用予定であった予算を使用した。具体的には、COVID-19によるアスリートの生活形態の再編、そのような状況下におけるアスリートの身体との向き合い方、さらに自転車競技団体のコミュニティ内外の関係性の変容や維持の様相の一部をあきらかにすることができた。2021年度は、それぞれ異なる文脈において本研究を深めることができた。(1) 移動および滞留する身体の感覚から生み出される自転車競技選手のリズミカルな経験世界、(2) 現役選手時代に習得した技能の引退後の展開、(3) 都市部に生きる若者の生涯における生計戦略という観点から捉えた自転車競技選手であること/あったことの効果。

現地フィールド調査を実施できない状態が続いていたため、研究期間再延長願を申請し、研究期間が当初の予定である3年間から5年間へと延長された。これは、社会集団の生成とその持続性を論じるという本研究課題の目的からして、結果的に(元)自転車競技選手の社会生活をより長いスパンで多角的に考察することを可能にした。ケニアにおいて自転車競技選手として生きるとはどういうことかを、彼らの生涯と関連づけて理解する助けになった。最終年度となった2022年度は、COVID-19の影響により見合わせていたケニアでのフィールドワークを約3年半ぶりに実施できた。元選手のライフヒストリーを重点的に収集することができた。対面でのインタビューや参与観察は、その人間の身振りや表情、また身体やモノを含めた空間までも捉えることを可能にした。具体的には、COVID-19によって生じたスポーツ選手の生活形態の変化と再編の詳細、自転車競技団体内外の関係性の変容の様相、さらに自転車競技から離れた元選手どうしのつながりや機微を調査することができた。

### 4. 研究成果

すでに研究方法の箇所でも触れているが、成果は大きく3つに分けられる。1つ目は、自転車競技選手の追跡調査から、都市部に生きる若者の生計戦略を生涯の過程に位置づけてあきらか

にすることができた。ここには、COVID-19 禍におけるアスリートの生活形態の再編、自転車コミュニティ内外の新しい職場等での人間関係の再構築という重要な論点も含まれる。2 つ目は、競技選手時代に培った広義の「技能」の引退後の展開、すなわち、元競技選手にみられる身体性を基盤とした関係性の持続的な性格をあきらかにすることができた。これには、元競技選手が団体 A を離れたあとも活用する選手どうしのネットワークの更新方法が含まれる。たとえば彼らは、自転車競技選手時代の「思い通りにならなかった身体」を特定の環境下やモノとともに現在の語りの中にふたたび引き出すことで、たがいの身構えを更新し、たがいの存在を了解していた。3 つ目は、当初の研究計画には含まれていなかったが、フィールドワークを実施できなかった期間に取り組んだ文献研究の成果である。植民地期よりアフリカの若者に向けられてきたまなざし、すなわち「発掘を待つ才能ある身体」と「エンパワーされるべき身体」というまなざしが、自転車競技団体の形成と存続に強い影響力をもっていることをあきらかにした。

各年度における研究成果の詳細は以下の通りである。申請書にも記したように、本研究課題は自身のこれまでのフィールドワークの延長線上に位置づけられる。2018 年度の文献研究を通して、これまでに収集していたデータの分析を複眼的に深めることができた。さらに、それらの成果を研究者以外の幅広い層に発信することができた。具体的には、以下の 2 点があげられる。

( 1 ) 萩原卓也、2019、「「わかる」への凸凹な道のり どうしようもない身体を抱えて走って」『ラウンド・アバウト - フィールドワークという交差点』神本秀爾・岡本圭史編、pp.27-38。( 2 ) 萩原卓也、2019、「痛みが開く、わたしが開く」同上、pp.39-50。

2019 年度は、8 月から 9 月にかけて実施したフィールドワークにおいて、競技生活から離れた元選手への追跡調査を通して、都市部に生きる若者の生計戦略と、ケニアにおける自転車競技というスポーツの特徴をあきらかにすることができた。これまでの文献研究とフィールド調査の成果を、以下 3 つの異なる層に対して発表した。( 1 ) 6 月には、新設された国際ファッション専門職大学にて、全身を投入して身体で考えるフィールドワークの意義を新入生に対し話す機会を得た。( 2 ) 7 月には、スポーツ人類学会が定期的に主催している「スポ人サロン」というセミナーにおいて、研究の進展が期待されるアフリカのスポーツ事情について研究者と共有する機会をもった。( 3 ) 8 月には、東京 2020 オリンピック・パラリンピックに関連した Sport For Tomorrow 事業の一環で、調査地であるケニアの在ケニア日本国大使館にて、現地の大学に勤務するケニア人のスポーツ研究者とケニア国家科学技術イノベーション委員会(NACOSTI)代表者の参加のもと、シンポジウムで研究成果を発表した(日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター主催)。ケニヤッタ大学の研究者を含む参加者と「よりよいスポーツの在り方」について議論を深めることができ、現地のスポーツ研究者と交流できたことは大きな収穫であった。今後は彼 / 彼女らと連携し、より幅広いアスリートを対象とした共同研究にもつなげていきたい。

2020 年度は、COVID-19 感染拡大により現地調査こそ実現しなかったものの、フィールド調査に時間を割けなかったぶん、これまでの研究内容を整理・分析することに力を注ぐことができた。そして、その成果を多くの研究会、シンポジウム、学会にて発表することができた。また、それらの一部を論文や総説として発表することもできた。おもな研究成果は以下の通りである。( 1 ) 生業としての自転車競技の側面とそれを支える競技団体の取り組みを分析した。Takuya HAGIWARA. 2021. Using Sport to Move on to the Next Stage of Life: The Case of Young Cyclists in Kenya. In W. Shiino & I. Karusigarira eds., Youth in Struggles: Unemployment, Politics, and Cultures in Contemporary Africa, pp. 187-213. ( 2 ) アフリカにおけるスポーツ競技の歴史と、開発援助事業や大衆スポーツの消費動向を含む今後の展望について解説した。田暁潔・萩原卓也。2020。「第 13 章グローバル×スポーツ：13-7. アフリカ」間野義之・上野直彦監修『スポーツビジネスの未来 2021-2030』pp.468-485。

2021 年度も、現地調査こそ実現しなかったものの、現地調査に割く予定だった時間を、アフリカにおける競技スポーツ全般の歴史を文献調査することに充てた。その成果をこれまでの研究内容とあわせて、論文として公刊することができた。歴史的にアフリカの若者に向けられてきたまなざしと、実際に彼らが経験する感覚による集団の形成とその持続性について分析し、論文として発表した。萩原卓也。2022。「身体をめぐるまなざしと感覚を基盤とした集団の形成と成形成 自転車競技選手として生きるケニアの若者を事例に」『史苑』82(1) : 135-164。

最終年度である 2022 年度は、これまでの研究成果を 2 つの国際会議で発表した。( 1 ) 競技時代に培った身体性を基盤とした他者との共存 / 並存の可能性に焦点を当て、International Conference of Ethiopian Studies で発表した。アフリカ現地での発表は、研究内容の地域的特性と普遍的な問いをあらためて検討する機会となった。( 2 ) また、International Symposium on Lifelong Sciences では、ケニアにおけるスポーツ経験が若者の生涯や生計戦略に与える効果について発表した。これは、今後の研究の展開を考えるうえでも貴重な契機となった。今後の研究の展開として、国際会議で得られたフィードバックやあらたな知見をもとに、( 1 ) 「ケニアにおけるアスリートの競技後の人生設計と人脈の活用」に関する論考を地域研究系の学術誌(『アフリカ研究』など)へ、( 2 ) 「身体性を基盤とした他者との共存 / 並存を可能にする身構え」を扱った論文をスポーツ研究系の学術誌(『スポーツ人類学研究』など)へ、( 3 ) 「練習で身体を動かす行為とそれに付随する疲労から生まれる感覚がいかにか自転車競技選手の経験世界を形づくりに、彼らの日常のリズムを形成しているのか」を考察する論考を投稿することを予定している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 萩原 卓也、ハギワラ タクヤ	4. 巻 103
2. 論文標題 書評：マイケル・クローリー著『ランニング王国を生きる 文化人類学者がエチオピアで走りながら考えたこと』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『アフリカ研究』（日本アフリカ学会学会誌）	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 萩原 卓也、ハギワラ タクヤ	4. 巻 30(1)
2. 論文標題 COVID-19に感染して触れるエチオピアの平熱－平常運転のたくましさやさしさ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 JANES NEWS LETTER	6. 最初と最後の頁 7-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 TAKUYA HAGIWARA	4. 巻 27
2. 論文標題 <Book Review>Out of Thin Air: Running Wisdom and Magic from Above the Clouds in Ethiopia. (Michael Crawley)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Nilo-Ethiopian Studies	6. 最初と最後の頁 22-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11198/niloethiopian.27.br02	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 萩原 卓也、ハギワラ タクヤ	4. 巻 82
2. 論文標題 身体をめぐるまなざしと感覚を基盤とした集団の形成と成形：自転車競技選手として生きるケニアの若者を事例に（<特集>アフリカの若者の身体）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 135～164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00021474	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Takuya HAGIWARA
2. 発表標題 Unfolding aging skills and aging relationships in another field: Attempts of former athletes in East Africa
3. 学会等名 International Symposium on Lifelong Sciences (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takuya HAGIWARA
2. 発表標題 Lifelong Engagement in Sport: Deployment of Skills After Retirement in the Case of East African Competitive Athletes
3. 学会等名 21st International Conference of Ethiopian Studies (ICES21) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 萩原 卓也
2. 発表標題 競技生活から離れて息づくわざ ケニアの元自転車競技選手が宿すもの
3. 学会等名 学術変革領域A 生涯学・文化人類学連携若手研究者ワークショップ 「生涯学の創出にむけた人類学的研究」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takuya HAGIWARA
2. 発表標題 Becoming a Self-reliant Man Through Their Experiences in the Athletic Group: The Case of Kenyan Youth in Competitive Cycling
3. 学会等名 The 4th meeting, ILCAA Joint Research Project “Global Youth Dynamics and ‘reality’ negotiation in Eastern Africa”
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takuya HAGIWARA
2. 発表標題 Development of Cultivated Skills After Retirement: The Case of Kenyan Youth in Competitive Cycling
3. 学会等名 International Workshop: Lifelong Sciences and Anthropological Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 萩原卓也
2. 発表標題 ケニアの自転車競技選手の移動と滞留 「ラウンドな世界」に絡みとられていくことを考える
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 萩原卓也
2. 発表標題 プロになりきれなかった彼らが得たもの ケニアにおける自転車競技選手の現役生活と引退後の展開
3. 学会等名 日本スポーツ人類学会第22回大会 シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 萩原卓也
2. 発表標題 習得技能の競技引退後における展開 ケニアの自転車競技選手の事例から
3. 学会等名 学術変革領域A 生涯学・文化人類学連携若手研究者ワークショップ 「生涯学の創出にむけた人類学的研究」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takuya HAGIWARA
2. 発表標題 Use of Sport x Social Media for Moving on to the Next Stage of Life: A Case of Young Cyclists in Kenya
3. 学会等名 ILCAA International Zoom Symposium: How Are Young People in Africa Thinking and Living? : Education, Unemployment, Aesthetics, Poverty, and Singleness (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 萩原卓也
2. 発表標題 肉体を基盤とした格差の形成と集団の成形 自転車競技選手として生きようともがくケニアの若者を事例に
3. 学会等名 2020年度 立教大学史学会大会 特集「アフリカの若者の身体」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takuya Hagiwara
2. 発表標題 Rethinking Sports, not Activity but Passivity, through Ethnographic Observation of Competitive Cycling Group in Kenya
3. 学会等名 Kenya-Japan Collaboration Workshop on Sport Research (Sport For Tommorrow, Japan Society for the Promotion of Science) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 萩原卓也
2. 発表標題 都市部のスポーツ事情と文化人類学のフィールド調査 - 自転車競技を中心に -
3. 学会等名 2019年第2回スポ人サロン (日本スポーツ人類学会主催) (招待講演)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 萩原卓也
2. 発表標題 考えるべきか、感じるべきか、フィールドワークではそれが問題だ(フィールドで見た、カラダを彩るライフスタイル)
3. 学会等名 『ラウンド・アバウト・フィールドワークという交差点』出版記念セミナー
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 萩原卓也, 池田あいの, 松隈俊佑, 重田真義, 重田真義監修, 金子守恵監修	4. 発行年 2022年
2. 出版社 地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS) MNGDプロジェクト	5. 総ページ数 33
3. 書名 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行下のエチオピアで安全にフィールドワークするために	

1. 著者名 Wakana Shiino, Ian Karusigarira (eds.), Takuya HAGIWARA etc.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa(ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies(TUFS)	5. 総ページ数 250
3. 書名 Youths in Struggles : Unemployment, Politics, and Cultures in Contemporary Africa	

1. 著者名 間野義之・上野直彦(監修)、萩原卓也ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日経BP社	5. 総ページ数 495
3. 書名 スポーツビジネスの未来 2021-2030	

1. 著者名 神本 秀爾・岡本 圭史（編）、萩原卓也ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 集広舎	5. 総ページ数 248
3. 書名 ラウンド・アバウト フィールドワークという交差点	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap <a href="https://researchmap.jp/takuya_hagiwara">https://researchmap.jp/takuya_hagiwara</a>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------